

秋の都内周遊酒ツアー



「発車オライ！」

秋も深まり、日本酒の美味しい季節になってきました。そこで、都内で酒にまつわるスポットを探し出して、架空の旅行会社「コンタツ観光」によるバスツアーならぬ酒ツアーを企画いたしました。ちょっとした旅行気分を味わっていただければ本望です。

北原伸一

Shinichi Kitahara

イラスト/永美ハルオ

「みなさま、本日は日本酒ゆかりの地を巡る『秋の都内周遊酒ツアー』にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。これからいろんなお酒にちなんだ名所を巡ってまいります。飲みすぎて記憶に残らなかったということにならないよう、くれぐれもご注意ください。もちろん車中でもお酒をご用意しております。安全ベルトをご確認の上、お楽しみくださいませ。本日、ハンドルを握るのは、安全運転一途に30年、ベテランドライバー、坂道登。ガイドを担当いたしますのは、花の独身、深酒好代でございます。それでは、みなさまお揃いになりましたようでございますので出発いたします。発車ああああ、オライ！」

まだ朝もやの残る東京都内。コンタツ観光の名物バスツアー「秋の都内周遊酒ツアー」は、好評に継ぐ好評で、バスを増便、平日にも関わらず、多くの愛飲家を乗せて本日もスタートした。

まず向かうは恵比寿。「とりあえずビール」ということで、エビスビールの記念館にバスは走る。「あらあら、ツアー3回目ご乗車の常連、佐々木のおじいちゃん、すでに赤ら顔でご機嫌のようですね。ピッチ早くないですか」

「バックこいてんでねえ。このバスガールがあ。こんなの水と一緒じゃ」「……バスガールとは懐かしいフレーズがでした」

ちなみにバスガールとは、中村メイコが「ト田舎のバスはオンボロ車あ」と歌い上げた昭和30年代に、登場した職業婦人のことで、当初ガイドではなく、女性の車掌さんのことをこう呼んでいた。紺色の制服に真紅の襟がほどこされていたことから、「赤襟嬢」とも言われた人気職業だった。ちなみに第1号はそれから遡ること大正時代。東京市街自動車の乗り合いバスに登場したといわれている。初任給は35円だったとか。などと説明している間に、最初の目的地・恵比寿麦酒記念館に到着。「みなさん。ちゃんとして来てくださいね。目印は私がついている徳利マークの旗です。ツアーはまだ始まったばかりですから……シラフですよ、もちろん」

ジ品などの実物資料や、写真パネル、明治期のビールラベルなどが必見。ビアサイエンスは、バーチャル・ブルワリーの中にあり、ビールを科学的に探究できる。製造工程を映し出すマルチビジョン、見学者が楽しく理解できる対話型映像システムなどがある。マジックビジョンシアターは、不思議な立体映像で、ビールの旨さの神秘を紹介している。「ビールの妖精」をめぐる、ビールの王様「ガンブリヌス」と森に住む「魔王」がおいしいビールについての大論争を繰り広げる、幻想的な寓話の世界が広がる。

しかし、ツアー客の目的は他にあった。「そんな説明はほどほどに、はやくビール飲ませろっ！」

ハイハイ、テイステイングラウンジへ足早に移動した一行。4種のビールを飲み比べできる「飲み比べセット」(500円)にしか目がいかないらしい。ビールのほかにワインも用意されている。開館時間は朝の10時から18時まで。開館と同時に滑り込んだ一行、「とりあえずビール」で軽く乾杯をし、次の目的地を目指す。

一行はまだ午前中だというのに大はしゃぎ。バスは白金高輪を抜け、赤穂浪士で有名な泉岳寺へ。街行くシロガネーゼに車中から冷やかしの

声をかける鈴木さん。「おい。お嬢！ここへ来て一杯やろ、な」

品がない。すかさずガイドが注意をする。

「お客様申し訳しわけないのですが、窓から顔や手、さらにはナンパの声を出さないでください。事故の元になります。特にこの白金地区ではナンパの声などまったく相手にされず、寂寥感という痛手を被りますのでご注意ください」

鈴木さんも負けてない。

「それならガイドさん飲も」

「申し訳ないですが、勤務中ですのでご遠慮いたします。私も乙女ですから、イケメンに誘われれば考えますが、鈴木様ではちょっと……」

「うっ……」

目的地の泉岳寺に到着。泉岳寺といえど赤穂浪士の墓所で有名だが、討ち入り三〇〇年を記念して立てられた赤穂義士記念館も見ごたえがある。もちろん酒にちなんだ品も展示されている。大石内蔵助が愛用した杯。不思議なもので、じっと眺めているとなんだかタイムスリップした気持ちになってくる。ちなみに展示品はその都度替えられるため、展示されないときもあるとのこと。「ハイハイ、記念写真撮りますよ」

子どもをあやすようにガイドさんが酔客を整理させる。

続いてはレインボーブリッジを渡り、お台場へ。若者が集まるホットなスポットを尻目に一路、**東京みなと館**へ。

「酒ツアーなのになぜに、東京湾眺めないといけんのか」

訛り交じりに田中さん。

「ハイ、酔い質問……、もとい、良い質問です。もちろん、東京湾の全景を楽しんでいただいで結構です。でもここでもっとも見ていただきたいのは、じゃーん、これです！」

指差すその先に展示されているのは、「樽廻船」の50分の1の模型だった。こう説明書きがある。

〈源流は寛文年間摂津におこった「小早（こはや）」という廻船。海難事故があったとき酒樽を放棄するなど、の事故処理の方法に対する不満から、酒店組が十組問屋から分離し樽廻船が独立した。船体が深く作られているのが特徴。樽の寸法を一定にし、積み込み時

間を短縮するなどの合理化を図った。二百〜四百石船で積荷が早く着いたため、菱垣廻船を圧倒した。〉

江戸時代の酒の流通の一端を垣間見ることができた。

「ガイドさんや、次はどこへ行くん

秋の都内周遊酒ツアー「発車オ～ライ!」



①ルパン



①鍵屋



⑩東郷神社



⑨サントリー美術館



⑧小石川後楽園



⑦関東松尾神社



⑥醸造試験所

「佐々木のおじいちゃん。すこし飲みすぎではありませんか」
「……まらまら、れんれん平気ら」
入れ歯をはずして飲んでいるためか、酔いが回っているせいか、ろれつが回っていない。
「次はそんな佐々木のおじいちゃんに是非手を合わせて欲しいところへご案内いたしま〜す」
バスは細い道を幾度も曲がり、下町風情が残る根津に到着。
「ハイ着きましたよ。佐々木のおじいちゃん、きちんと拝んでください」
そこは円光寺。ここには「禁酒地蔵」がある。
「ハイハイ、こう手を合わすんじやなって、わしゃ禁酒などせんぞ。しかし小腹がへつてきたな。昼飯はど〜うすんじや」
「そうですね。次の目的地で、昼食といたします」
一行は、北区の公園へ向かった。
「桜の名所といえば、飛鳥山公園ですが、桜の季節でもありませんし、それでは『酒ツアー』になりません。そこで当ツアーが選んだ公園は、この醸造試験所跡地公園です」
「つていうか、何にもないぞ」
「ええ。跡地ですから。この広い芝生の上でお弁当を楽しみましょう」と言い終わらないうちにすでに宴

会状態。醸造所を模したトイレが側にあり、安心して酒を飲める。小さな公園だが、開放感がたまらない。
ひとしきり宴会を楽しんで午後のツアーが始まる。一行は、文京区の白山神社内にある関東松尾神社へ。いわずと知れた酒の神を拝み、その足で小石川後楽園を訪れる。ご存知水戸光圀が完成させた庭園だが、見学したいのは園内にある九八屋。江戸時代の風流な酒亭の様子を再現した。この名の由来は「酒を飲むに昼は九分、夜は八分にすべし」と酒飲みみならず万事控えるを良しとする、との教訓によるらしい。
バスは都心に戻り、六本木ミッドタウン・サントリー美術館へ。「生活の中の美」をテーマに三千点を越える美術品が展示されている。ここでは、江戸時代の徳利をご覧あれ。最先端の都心スポットでみる江戸時代の美術品。そのアンバランスさが小気味良い。
続いては、原宿の東郷神社。ここでは東郷平八郎をラベルにあしらった東郷ビールがお奨めだ。
さすがに駆け足で巡ってきた都内酒バスツアー。最後はやはり飲み屋さん。一行はここで二手に分かれることに。佐々木のじいさん率いる居酒屋組は、再び根津へ。シロガネー

ゼ好きの鈴木さんらバー組は、銀座へと繰り出すことに。
根津にある鍵屋は、古きよき日本を感じる居酒屋。カブトビールのポスターが郷愁を呼ぶ。実は、本来の店舗は、小金井市にある江戸東京たのみの園に移築されている。その酒樽を使用した椅子には宮崎駿監督も座り、その様子がアニメにも描かれたという。
銀座のルパンは、空襲を逃れたこれまた時代がかった老舗バー。菊池寛、泉鏡花、永井荷風、川端康成などが支え、坂口安吾、太宰治らも足繁く通ったという。太宰は、一番奥のカウンターに座り、次作の構想を練っていたに違いない。坂口安吾が愛したカクテルは今でもメニューとして残っている。
「みなさま、本日一日、私のつたないガイドにお付き合いました。ましましてまことにありがとうございます（パチパチパチ）」